

全米女性労働組合連盟の広報・教育活動 —「シスターフッド」の視点から—

羽 鳥 修

The Publicity and Educational Activities of National Women's Trade Union League; From the Standpoint of "Sisterhood"

Osamu HATORI

<Summary>

The National Women's Trade Union League was founded in 1903 to organize female workers into trade unions. The League was a structurally unique organization as its membership were trade unionists and allies — wealthy women disenchanted with conventional philanthropic and reform activities. In spite of their different motivations to join the League, the ideal of "sisterhood" made their cooperation possible.

The NWTUL strove to organize female workers through publicity and educational activities. That is, publicity and educational activities were the means used to achieve the purpose of organizing. When the League encountered certain difficulties and met with little success, it soon shifted its chief strategy from the work of unionizing to publicity and educational activities. This shift meant that allies' influence among the League became greater and the ideal of "sisterhood" collapsed at the same time.

〔はじめに〕

女性労働運動の推進母体となった全米女性労働組合連盟(National Women's Trade Union League [以下、リーグと表記する。])は、1874年にイギリスで結成された女性労働組合連盟(Women's Trade Union League)をモデルとして1903年に発足した⁽¹⁾。リーグの活動目標は、組織発足のための会合で採択された憲章によれば、女性労働者を労働組合に組織化することであった。しかし、女性労働者の組織化は十分な成果をあげることはできなかった。その結果、女性労働者の組織化を継続する一方、徐々に労働者を保護するための立法化と婦人参政権の立法化を目指す方向に活動の重点を移していくことになる。リーグは1950年まで存続することにはなるが、第1次世界大戦直後に作成した「社会・産業再建委員会計画」("Program of the Committee on Social and Industrial Reconstruction")に示された社会保健や高齢者及び就労不能者に対する公的援助などを求める社会福祉活動へと方針を転換していくことになる。このため、女性労働者の組織化という設立時の目標は名ばかりのもとなり、1920年代半ばまでには実質的にその存在意義を失っていった⁽²⁾。

リーグの機関誌『生活と労働』(*Life and Labor*)では、「未組織の労働者が個別に雇用主と交渉するとき不利かつ不公正であり、長時間労働による疲弊が生み出す危険性や低賃金をもたらす結果を理解させるために注意・関心を喚起する」こと、そして「私たちの労働組合連盟の必要性和価値とを未組織の労働者に理解させるための教育」を通じて、設立目的である女性労働者の組織化を進めるべきであるとされた⁽³⁾。すなわ

ち、「組織化の活動」、「広報活動」、「教育活動」の3つがリーグの活動として強調されたのである。もう1つ注目すべきことは、リーグが富裕階級と労働者階級の女性によって構成された点である。これら階級の異なる女性をリーグに結集させた統合の理念が「シスターフッド」(sisterhood)であった。階級の相違を越えて女性が団結、協力して活動を展開することが前提とされたのである。この小論では、女性労働者の組織化を活動の中心としていた時期に焦点をあて、広報及び教育活動を具体的に検討しながら、シスターフッドという統合の理念がリーグにとってどのような意味をもったのかを考えてみたい。

〔1〕女性労働者の実態

1820年代末に繊維産業の分野で始まり、1850年代末までには重工業の分野でほぼ産業革命の完成期を迎えたアメリカでは、南北戦争後とりわけ1880年代以降著しく工業化が進むなか、また同時に都市化および移民の大量流入という状況が進行するなか、ニューヨーク、シカゴ、ボストンなどに代表される都市では未曾有の変化が始まっていた。例えば、独占化の進行による貧富格差の拡大という経済上の問題、スラム街の発生に伴う不衛生や犯罪などの社会的問題、移民票をもとに勢力を伸長したマシーンに代表される政治的問題など、その後のアメリカが抱える諸問題が生じ、19世紀に支配的であった伝統的な社会状況は大きく変貌しつつあった。世紀転換以降、そうした社会状況の変化は一層加速化されていった。

こうした状況のなかで労働者に着目するならば、彼らの状況もまた大きく変わりつつあった。ほぼここで対象としている1905年から1914年の時期をみると、この10年のうちで6年間は毎年100万人が、また残りの4年間には毎年75万人以上の移民がアメリカに渡っている。また、都市のレベルでみれば、ヨーロッパからの移民にとってアメリカ入国の際の入口であったニューヨークは、工業化に伴う雇用機会の増加によって外国から多くの移民を引きつけた。1910年にはニューヨークに居住する外国生まれの人口はおよそ193万人へと膨れ上がり、同市における全人口の約40パーセントを占めた⁽⁴⁾。しかもこの時期にアメリカへ渡った移民の多くは、イタリアやロシアなどの南および東ヨーロッパの出身者が占めた。これら新移民系の労働者は、中世ヨーロッパの農村的、家内制手工業が支配する世界から、突如として機械制工場制度が支配する工業化された都市的世界に身を置くこととなったのである。彼らのほとんどは自営農民となるための資力や熟練技術をもたなかったために、大都市の工場で低賃金、長時間労働、不衛生で危険な労働環境の仕事に就かざるを得なかった。マンハッタンのユダヤ系移民労働者のゲットーは「多くの労働者が絶え間なく働く終わりなき仕事場へと通じる通路であり、そこは朝も昼も、また夜もなく、いつでも同じ光景」であり、そこには「他の残り半分のアメリカ人の生活」があった⁽⁵⁾。彼らは、労働条件に不平を漏らせばすぐに他の者にとって代わられる雇用不安と常に隣り合わせにある労働者でもあった。そうした状況下にあって彼らが頼ることのできる存在としては労働組合があった。しかし、当時最大の組合員数を擁していたアメリカ労働総同盟(American Federation of Labor, 以下、AFLと表記する。)は、政治活動には距離を置き、職能別組合主義とヴォランティアの路線に沿って組織されていたために、新移民系労働者は労働運動の主流に組み込まれない対象であったばかりでなく、低賃金労働者であるためにAFLからは敵意をもって見做される対象でもあった。

しかし、新移民系の労働者のなかでも一層困難な状況下にあったのが女性労働者であった。リーグが設立された頃、ニューヨーク市では35万人の女性労働者がいたが、このうち約半数はサービス業で働き、またおよそ三分の一は製造業に従事していた。リーグのニューヨーク支部⁽⁶⁾がとりわけ重点をおいて組織化しようとしたのが、製造業のなかでも衣服産業で働く非・未熟練の女性労働者であり、これら東欧出身のユダヤ系移民やイタリア系移民の女性労働者は、19世紀後半に主流であったドイツ系やアイルランド系に代わり同産業では数のうえで支配的な存在となりつつあった。これら新移民系女性労働者のなかには、家族と生活をとともにする年齢的に若い未婚の女性が数多く含まれていた。『生活と労働』には、両親と2人の妹とともにアメリカに渡ったが、父親の収入が少なく、また家計を補助するために働いていた母親が病気になったため、5ヶ月間通った学校を退学して働きにでなければならなかったロシア系ユダヤ人少女が次のように紹介され

ている。

6年前、私は12歳のときに働き始めました。まだそのときには年端もゆかぬ子供だったので、仕事場のボスは工場視察委員が調査に来ると、私をコートで覆ったほどでした。私は、ストラウス・アイゼンドラスという子供用のジャケットを作っている工場で3年間働きました。そこでは、忙しい時期でさえ週給3ないし4ドルでした。……私たちは通常朝7時半から働き始めました。昼食時には30分の休憩がありますが、30分間休んだことはなく、ほとんどの時間働き詰でした⁽⁷⁾。

ここで紹介した少女は特殊な例ではない。1910年の調査によれば、ニューヨークの女性労働者の多くは外国生まれか渡米してきた移民の娘であり、年齢は平均20歳で、16ないし17歳から働き始め、6、7年間働いた後は結婚して退職するというのが一般的なパターンであった。また、87パーセントが家族と生活し、彼女らが労働の見返りとして得た報酬は生活をともにする家族の生活費に充当されるのが一般的であった。1890年代から既成服の需要増大と製造技術の進歩によって廉価な労働力を大量に必要としていた衣服産業における女性労働者の平均賃金は、年間250ドル以下にすぎなかった。当時の労働者が最低の生活を送るのに必要とされる見積み額が年間650から800ドルであったことを考えれば、女性労働者が相当低い賃金に甘んじていたことが理解できよう。また、当時の衣服産業においては、ミシンの導入による仕事のスピード化によって肉体的・精神的疲労を余儀なくされていた⁽⁸⁾。また、当時の女性労働者は危険な労働環境におかれており、そうした環境はしばしば悲惨な事故をもたらした。その代表的な例は、1911年にマンハッタンにあるトライアングル・ブラウス縫製工場（Triangle Shirtwaist Company）で起きた火災事故であり、多くの女性労働者を含む146人の生命が奪われた。事故の直接的な原因はタバコの不始末によるものであったが、2年前には防火対策として防災訓練をするように指導をうけていながらこれを怠っていたことや、火災から逃れるために窓から飛び下りて47人が命を落としたように、作業場のある9階の出入口には製品が山積みされていたばかりでなく、就業中は製品の盗難を防ぐという理由で施錠されたままになっていたことも、大惨事を招いた原因であった。トライアングル工場での火災事故を調査したニューヨーク州の工場視察委員会（Factory Investigation Commission）の報告書は、火災事故を引き起こした原因が同工場にだけみられる例外的なものではなく、州内にある多くの工場に共通してみられる劣悪な労働環境にあったと結論づけた⁽⁹⁾。

非・未熟練の新移民系労働者は、長時間、低賃金、不安定な雇用、不衛生で危険な職場という劣悪な条件下におかれていたが、なかでも女性労働者は劣悪な環境にあったのである。彼女たちは、労働者としてまた女性として、二重の搾取に苦しんでいたのである。リーグが特に組織化の対象として力を注いだのが、これら新移民系の女性労働者であった。

〔2〕「シスターフッド」の思想

リーグは女性労働者を組織化することで労働条件の改善を目指したわけだが、注目すべき点は構成メンバーと彼らを支える思想的基盤にある。発足にあたって採択された憲章によれば、リーグのメンバーは女性労働者、女性労働者の組織化に関心をもつ労働者階級以外の賛同者（ally）、労働組合運動に共鳴する者及び労働者、により構成されることとされた⁽¹⁰⁾。すなわちリーグの目的である女性労働者の組織化に同意するすべての人がメンバーとなる資格をもってはいたが、リーグのメンバーは実質的に賛同者と女性労働者が占めた。ニューヨーク支部のメンバーであるドライアー（Mary E. Dreier）は、「ニューヨークのリーグは、他の都市におけるのと同じく、産業に従事しない女性が、無秩序な産業界にあって仲間の女性労働者が自己の道をしっかりと歩めるよう援助するのに貢献できると信じる少数の熱心な人々が集まって発足したのである」⁽¹¹⁾と述べている。リーグの初代会長にはボストンの上流階級出身の社会改革者であり労働運動を理解し支援してきたケヒュー（Mary M. Kehew）が、副会長にはアダムズ（Jane Addams）が選ばれた。アダムズは、ア

アメリカにおけるセツルメントの草分け的存在であるハル・ハウス (Hull House) を運営するとともに幅広い社会改革運動を行っていた人物で、リーグの設立にあたり中心的役割を担った上流階級出のウォーリング (William Walling)、アイルランド系移民の子で自ら労働者として女性労働者の組合を設立した経験をもつオサリヴァン (Mary O'Sullivan) など多くのメンバーに影響を与えた。セクレタリーにはオサリヴァンが、監査役にはマサンチューセッツの中央労働組合 (Central Labor Union) で活動するドノヴァン (Mary Donovan) が選出された。また、執行部のメンバーにはシカゴのセツルメント・ワーカーであり、食肉缶詰産業で女性労働者の組織化を推進していたマクダウェル (Mary McDowell)、ニューヨークのセツルメント・ワーカーであり衣服関連産業で小規模ながら女性の労働組合を設立した経験をもつウォルド (Lillian Wald)、そしてアイルランド系移民労働者を父に持ち、11歳から工場で働き始めて労働組合運動に関わり、セツルメント・ワーカーでもあったオレイリー (Leonora O'Reilly) を含む3人の労働組合員——また執行部のメンバーには2人の男性労働組合員を含んではいたが、それは労働組合との協調的な性格を示すそうとする形式的なものにすぎなかった——が選出された⁽¹²⁾。このように、リーグは富裕階級の賛同者と労働者階級の女性によって構成されており、異なる階級の女性をリーグに結集させたのがシスターフッドという思想であった。

ただし、シスターフッドという考えはリーグが最初に提示したものではない。リーグ設立以前にも、例えばワーキング・ガールズ・クラブ (Working Girls' Club) や消費者連盟 (Consumers' League) など、階級を越えて協力することを目指す女性の組織は存在した。しかし、これらの組織では人的にも機能的にも富裕な女性があくまで主導的役割を果たしており、そこには「上の者」が「下の者」に何かをしてあげるという貴婦人的なエリートイズムがあった。他方、同じくシスターフッドの思想に依拠しながら、富裕な女性と労働者階級の女性が平等な立場の組織を目指したところにそれ以前の女性組織とは異なるリーグの特徴があった。この点は、リーグ規約のなかで賛同者である富裕階級の女性に支配されることを回避するため、執行部の過半数は女性労働者の組合員が占めることが規定された点から看取できる⁽¹³⁾。その意味で、女性労働者を組織化する活動のなかでどれだけシスターフッドの思想を実践できるか、換言すれば階級の異なるメンバーがどれだけ平等な立場で協力できるかがリーグにとって重要な課題であった。

ここで、リーグのメンバーを支えるシスターフッドの思想について、賛同者と女性労働者の関係を確認しておきたい。賛同者の多くに共通する特徴は、経済的に豊かであったことや大学などで高等教育を受けていたこと、旧移民系のアメリカ生まれであったこと、さらに19世紀末から今世紀初頭にかけて数多く設立されたセツルメント (settlement) での活動経験をもっていたことなどが挙げられる。アメリカで古くから行われてきた例えば教会などの慈善活動にみられる伝統的な博愛主義的活動に限界を感じたりや不信感を抱き、また自ら受けてきた高等教育を現実の社会のなかで実践する場として身を寄せたのが、苦境にある移民と寝食を共にしながら相互理解を深めつつ私的レベルで社会福祉的活動を行っていたセツルメントである⁽¹⁴⁾。非労働者階級の女性が賛同者としてリーグに加わった動機は、女性労働者を組織することによって労働環境を改善するとともに、女性労働者の関心を女性主体による運動と結び付けることで女性全体の地位向上とを目指すことにあった。すなわち、賛同者は労働運動とフェミニズム運動とを連動させることが自己の役割であるという認識をもっていたのである。他方、女性労働者がリーグに加わったのは、過酷な労働環境を改善するためには労働組合が必要であり、リーグがこの目的を実現するための当時における唯一の組織であったこと、またフェミニズム運動が女性労働者の環境改善に役立つと考えたからである。このようにリーグのメンバーである賛同者と女性労働者のあいだには、労働運動とフェミニズム運動に対する考え方に差はあったが、双方ともこれら2つの運動が重要かつ不可分の関係にあると認識していた。従って、リーグは女性労働者の組織化とフェミニズム運動の推進という2つの目的をもっていたのである。また、メンバーのあいだには階級の相違を越えて、同じ性に属す女性として共感し協力できるとするシスターフッドの思想が共有されていた。では、なぜシスターフッドの思想が異なる階級の女性をリーグに結集できたのであろうか。リーグのメンバーは、女性が男性とは根本的に異なる存在であるとして、性差がもつ重要性を強調した。すべての女性

は男性よりも優しく道徳的であり、人間が必要としていることに対して繊細かつ敏感であるとされる。また、女性は法的に差別され、政治的に参政権が与えられず、社会的に男性より劣る地位にあるという点で抑圧された状況におかれており、それ故にお互いに共感できるという⁽¹⁵⁾。つまり、男性とは異なる特質をもつ抑圧された集団という共通の認識が、異なる階級の女性を連帯意識で結びつけたのであり、これを言説化したものがシスターフッドであった。

〔3〕広報・教育活動

1903年に発足したリーグは、例えば衣服やネクタイ、帽子、ペーパー・ボックス、キャンディ、造花などの業種で小さな組合を結成させるための日常的な活動を開始する一方、この目的を実現する手段として広報活動を展開した。

少女が外に働きに出ようになるとき、最初に彼女のなかに生じるものは、独立心とその帰結として生じる自尊心という意識である。(しかし)彼女は一個の存在にすぎない。……彼女は、賃金のカットを余儀なくされて、かろうじて生活できるか、あるいはまた最低の生活すら送ることができないところまで自分を追いやる経済的圧力に直面するとき無力である。こうした緊急の事態に直面して初めて、彼女は自分が独立した存在であるという誇りの滑稽さに気付くのであり、……⁽¹⁶⁾。〔() 内筆者〕

また、賛同者の一人により作成されたショート・エッセイ集の基礎テキストでは、次のように平易な言葉で女性労働者に対するアピールがなされている。

私は朝8時に仕事に出掛け、6時まで働きます。

昼食のために与えられるのは30分だけです。

仕事が忙しい時期になると、もっと多くの時間働きます。

でも、時間外の労働に対する手当てはもらえません。

忙しい時期の週給は8ドルですが、暇な時期の週給は3ドルか4ドルです。

私は、3ヶ月間まったく働くことができないときがありました。

仕事で使う針や糸、そして機械を動かす電力の代金は、私が負担するのです。

昨日会った私の友達は、恵まれた職場で働いています。

彼女は午後5時に帰宅し、土曜日は午前中だけ働きます。

毎日、昼休みも1時間あります。

彼女の週給は12ドルです。

彼女は忙しいとき残業することもあります、時間外労働に対しては手当てが出ます。

彼女は、その業界の組合に所属しています⁽¹⁷⁾。

ここで引用した前者の例は、女性労働者が未組織の状態にあるとき無力であること、また後者の例は、逆に組合への加入がもたらす利点を訴える内容である。ニューヨーク支部のメンバーが「若い女性労働者を積極的に反応させるためには、労働組合がもたらすさまざまな良い点を語ることに尽きると信じていた」⁽¹⁸⁾と回想しているように、組合への加入がもたらす利点を訴える手法がしばしば用いられた。

しかし、そうした手法は女性労働者の組織化にとって必ずしも効果的な方法ではないという反省から、さまざまな教育活動が試みられた。反省の根底にあったのは、リーグのメンバーが日常的に接する機会をもつことで女性労働者を熟知しなければ組織化が進まないという認識であった。ニューヨーク支部では、初期の

段階から女性労働者との交わりをもつために午後の茶会 (afternoon tea) やダンス・パーティなどの機会を設けた。また、1904年にはペーパー・ボックス工場で働く女性労働者のストライキを皮切りに帽子製造工場で働く女性労働者のストライキを支援したが、労働組合がもたらす利点を訴える戦術は効果的な組織化に結びつかなかった。そのため、リーグは「抑圧の度合いが強いほど、それだけ組合化の方向に向かう」という判断から、また「反乱の準備」ができて多くのロシア系ユダヤ人が従事しているという理由から、労働環境が最も劣悪な衣服産業の女性労働者に的を絞った。仕事を終えて帰宅するのを待ち、工場の出入口付近で労働組合主義を説いた。「ニューヨークの街頭で、そうした会合を行っていたのは救世軍 (Salvation Army) だけであった」と、街頭での広報活動を新たな戦術として誇った⁽¹⁹⁾。しかし、午後の茶会、ストライキの支援、街頭での広報活動も予期した成果をあげられなかったばかりか、午後の茶会などの交流活動に携わる賛同者と労働組合主義に主眼をおき街頭演説の活動に熱心であったメンバーとのあいだにしばしば確執が生じた。後者の立場をとるオレイリーやカーシー (Josephine Casey) が一時的にリーグを脱退した理由もそこにあった⁽²⁰⁾。

午後の茶会やストライキの支援、街頭での広報活動は予期した成果をもたらさなかったが、リーグに1つの教訓を与えた。それは、労働組合の重要性を訴える際にすべての女性労働者を画一的に捉えていたことに対する反省であった。同じ女性労働者でも、技術的レベル、職種、人種・民族的な社会背景が異なっていることに注意を払わなければならないことに改めて気付いたのである。その結果、エスニック・グループ毎に女性労働者の組織化を進める一方、女性労働者のための教育プログラムが開始されることになった。

リーグが組織化の主な対象とした熟練技術をもたない新移民系の女性労働者に対して、例えばニューヨーク支部ではオレイリーらが中心となってマンハッタン職業訓練場 (Manhattan Trade School) が設けられた。そこには、技術訓練がより高い賃金、より安定した雇用、また労働者としての意識の高揚を生み、それがひいては組織化の促進に繋がるという発想があった。職業訓練が注目されたのは、リーグが職能別組合主義・ヴォランタリズムに基づくAFLの路線に沿った組織化を目指したことを考慮すれば当然のことであった。しかし、ニューヨーク支部が技術訓練を試みた女性労働者の従事する帽子やワンピースを製造する業界は最たる季節産業であり、そこでの労働者は短期的に雇用される存在であったため組合の設立もさることながら、組合の維持は一層困難であった。従って、同支部では職業訓練は熱心には行われなくなっていた⁽²¹⁾。職業訓練教育の重要性は認めながら、そうした教育は国と州が協力し公的教育機関で実施されるべきだとするのがリーグの姿勢となったのである⁽²²⁾。

職業訓練の実施と比較して、リーグにとってより重要な意味をもったのは英語の教育であり、この活動はリーグの性格を反映するものとして注目しなければならない。英語教育の活動に直接あたったメンバーは、以下のように英語教育を開始した契機と必要性を説明している。

……異なる国籍をもつこれらストライキ (シカゴにおける衣服産業のストライキのこと) に参加した4万5千人の人々と接触をもとうとしたとき、彼らが英語の能力をもたなかったこと、そして彼らがこの国の状況を理解せず、また彼らの状況を改善するために設立された組合さえ信頼しない臆病な姿勢をとったことは、ほとんど克服しがたいがたい障害となって私たちの前に立ちはだかったのである。

……私たちのリーグは新しい認識を持つに至った。1つは、彼ら移民にとって英語が必要なこと、そしてもう1つは彼らと私たちが共通の理解をごく自然に共有できるように、より親密に交わる必要があることであった⁽²³⁾。[() 内筆者]

英語教育に携わった別のメンバーは、

おそらく、今日行われている教育分野の活動にあって最も新しいものは、成人を対象とした英語教育である。以前より外国生まれの子供たちを良き市民として育てるためにはあらゆる教育的機会を提供する

必要があることを認識してきたが、外国生まれの人たちのなかであって年齢が高い人たちに対して私たちが果たさなくてはならない教育的・社会的責任を今ようやく自覚するようになりつつある。アメリカで用られている言語を駆使できない場合、その人たちはたやすく犠牲の対象となる。……労働搾取工場(sweat shop)は、言葉の無知が生み出した最たる例である。「ボス」が「新来の移民」を優先して雇用するのは、英語を習得してアメリカの習慣を良く理解するようになって生活賃金を要求するようになるまで、彼らが低賃金で長時間働くことを知っているからである。彼らが生活賃金を要求すれば、直ちに解雇を言い渡され、賃金に不満を漏らせば彼らに取って代わるたくさんの「新来の移民」がいることを思い知らされるのである⁽²⁴⁾

と述べている。これら2人のメンバーによる発言は、組織する側と組織される側が英語という共通の言語で意志の疎通と相互理解をはかり、適切な賃金と安定した雇用を確保するには英語の能力を身につける必要性があること、またそうした重要な意味をもつ英語教育の活動は、リーグにとっての果たすべき「社会的責任」として位置づけられていたことを示している。リーグの英語教育は移民系女性労働者の経済状況を配慮して無料で行われ、この活動では英語教育を通じて労働組合がもつ意義も教えられた⁽²⁵⁾。

1913年6月2日から7日にかけてリーグの第4回全国大会がセントルイスで開催された。2年毎に開かれ、丁度リーグ設立から10年の節目にあたるセントルイス大会の初日に行われたロビンズによる会長演説では、女性オルグの育成が提案されている。その内容を要約すれば以下になる。女性の職場進出が顕著であり、劣悪な労働環境に対して多くの女性を含む労働者がストライキを起こしている状況のなかで必要なことは、女性労働者を教育してオルグを育てることである。組織活動のための訓練を実施しなければ、ストライキを通じて余儀なくされた投獄など多くの困難や苦しみが水泡に帰してしまうことになり、この活動は女性オルグなしには達成されない。労働組合主義の基本原則である産業民主主義(industrial democracy)は、労働者の団結による行動によって初めて可能になるが、そのためには女性オルグが不可欠である。そうした要求は多くの州から寄せられており、女性オルグを育成して全米各地に送りださなければならない、というものであった⁽²⁶⁾。同大会はこの会長提案を採択し、直ちに委員長にはリーグの副会長でシカゴ支部では専任のオルグであり、かつて労働者として製靴組合のメンバーであったアンダーソン(Mary Anderson)が任命された。また、労働組合員と賛同者各3名ずつで構成されるプログラム作成のための委員会が設置された。委員会が作成した女性オルグ育成のためのプログラムでは、1年間スカラシップを与えられてシカゴに滞在し、その間に労働史、産業関係、英語、弁論術などアカデミックな意味での勉強と、女性労働者の組織化および労働組合の機能と運営方法のフィールドワークなど実務体験の訓練が実施されることになった。こうして女性オルグ育成の活動は1913年の冬に3人の研修生を迎えて開始され、財政的な危機と第1次世界大戦による中断はあったが、1926年半ばまで続けられた⁽²⁷⁾。

リーグは教育活動を展開する一方で、先に紹介した午後の茶会や街頭演説の他にも教育活動の一環として広報活動を試みている⁽²⁸⁾。その中心的な活動は、1911年1月から1921年10月に財政難を理由に廃刊されるまで発行された月刊の機関誌『生活と労働』であった。リーグは1903年に設立されたが、元々はそうした機関誌をもたず、シカゴで発行されていた『労働組合唱道者』(Union Labor Advocate)という月刊労働雑誌のなかの「女性部」(Woman's Department)にリーグのための紙幅が与えられていた。「女性部」の編集人であった賛同者ヘンリー(Alice Henry)は、同誌が労働界の男性を主たる読者層としていたことから、多くの男性労働者に「女性部」で取り上げている女性労働者に関する記事が読まれることは広報活動としての役目を果たす唯一絶好の機会であると考えていた。しかし、1910年の春、リーグの執行部は同誌の発行がシカゴ地域に限定されていること、またより広範な読者層を獲得したいという目的から、独自の機関誌を刊行することを決定した。創刊号の論説では、今日アメリカの社会および産業界における不公正で不公平な悪しき状況を根本的に改善するという難題を抑圧されている集団に委ねるのは残酷かつ思慮に欠けた方法であり、社会全体が協力して変革のための行動を起こすのに必要な相互理解を共有できるようにすることが『生活と労働』

働』の役割であると位置づけられ、産業界を中心とした社会改革には世論を盛り上げる広報活動が不可欠であるとされた⁽²⁹⁾。実際、『生活と労働』ではリーグの活動報告や女性労働者を啓発する内容のほか、女性参政権運動に代表されるフェミニズム運動に関するもの、AFLの活動および男性労働組合員に手によるもの、産業状況の調査報告、詩、書評、連載物語など多岐におよぶ記事が掲載された。このように、『生活と労働』が読者層として念頭に置いていたのは、女性労働者だけではなく、そこにはフェミニズム運動にかかわる者、男性労働組合員、そして一般大衆が含まれていたのである。ただ同時に注意を払わなければならないことは、編集にあったのがいずれも労働運動よりはフェミニズム運動により大きな関心をもつ賛同者であったため、『生活と労働』はシスターフッドの思想を強調する傾向があった点である⁽³⁰⁾。

【おわりに】

リーグの設立目的は、女性労働者の組織することであった。ただし、構成メンバーである上流階級の女性メンバーと労働者階級の女性メンバーとのあいだには、リーグへの参加動機に関して微妙な違いがあった。賛同者の多くは、女性労働者の組織化を通じて労働環境を改善するとともに、女性労働者の関心をフェミニズム運動のなかに統合することで女性全体の地位向上を目指す展望をもっていた。他方、労働者階級の女性メンバーは、劣悪な労働環境を改めていくには第1に女性労働者の労働組合が必要であり、これを推進するためにはフェミニズム運動が役立つとともに、女性労働者の組織化が発展的にフェミニズム運動に連動することを理想であると考えた。従って、リーグは女性労働者の組織化による労働組合運動と女性の地位向上を目指すフェミニズム運動の推進という2つの目的を担っていたのである。しかし、賛同者がフェミニズム運動という枠組みのなかに女性労働者を組織する活動を位置づけていたのに対し、労働者階級のメンバーにとって、フェミニズム運動は女性労働者の組織化を進めるための手段だったのであり、それ自体が目的であったわけではない。

メンバーのあいだにはこのような参加動機に関する微妙な相違があったにもかかわらず、階級の異なる女性をリーグに結集させる力となったのがシスターフッドの思想であった。シスターフッドの思想によれば、共通の性をもつ女性は同じ社会集団に帰属しているという意識をもち、階級や民族・文化的な相違があっても同じ考えを共有できるはずであった。女性としての連帯意識は、さまざまな相違を克服する可能性をもつものであると信じられたのである。リーグがそれ以前に存在した組織と異なっていたのは、女性労働者を組織して労働組合運動を展開しようとしたからではなく、またシスターフッドという思想のもとで階級の異なる女性が団結して行動したからでもない。リーグが新たな試みであったのは、異なる階級の女性が平等な立場で協力し、労働運動とフェミニズム運動を総合して推進するという2つの目的を担った点にある。

リーグは、女性労働者の組織化を進めながら、この活動を効果的にするために広報・教育活動を行った。女性労働者の組織化がリーグの目的であるなら、広報・教育活動はこの目的を達成するための手段と位置づけられたのである。女性労働者の組織化と広報・教育活動がそれぞれ目的と手段の関係にある限りにおいては、メンバーのあいだに大きな亀裂が生じる可能性は少なかった。目的を達成するための手段に関しては、すでに述べたとおり意見の相違や力点の置き方に違いがあったことは確かだが、そうした対立はメンバーのあいだに目的が共有されているあいだは修復可能な範囲のものであった。しかし、あくまで手段であった広報・教育活動がリーグの目的となっていくとき、そうした変化はリーグが目指した賛同者と女性労働者の平等な立場を崩壊させる可能性を生む前兆となる。

職業訓練、英語教育、女性オルグの育成は、直接的には女性労働者を組織するための啓発的な教育的手段である。しかし、結婚までの一時的かつ依存的な移民系女性労働者を自立的・恒久的労働者に育てること、また英語の習得を含むアメリカ的生活様式を身につけたアメリカ市民に育てること、そして女性労働者のなかから労働運動のリーダーを育てることなどを目指したリーグの広報・教育活動は、産業界を中心とする社会改革を視野に入れた性格をもつ活動であった。「労働組合が社会にもたらす利益は、必ずしも高い賃金と短

縮された労働時間にあるのではなく、むしろ労働組合が誘因力として機能することによって進取の精神と社会的リーダーシップを育て、誰もが理想として抱いている産業関係と希望によって道徳的・理性的な能力を導き出し、他者に依存しない独立した集团的力としての協力意識を生み出すことにある」⁽³¹⁾というのは、富裕階級出身で1907年からリーグの会長を務めたロビンス (Mary Dreier Robins) の言葉である。産業界におけるそうした新しい女性労働者の輩出は、社会の改革と不可分の関係にあることをリーグのメンバーの認識していた。それ故にこそ、リーグは女性労働者の組織化と彼女たちの関心をフェミニズム運動に統合するという2つの目的を掲げたのである。そして、2つの目的を同時に担ったのが広報活動の中心である『生活と労働』であった。機関誌が組織の政策や活動を映す鏡としての性格をもつことを考えれば、同誌が女性労働者ばかりでなく非労働者階級の女性や男性労働組合員を中心とした幅広い読者層としていたことは、とりもなおさず産業界を中心とした社会改革を目指したことを意味している。頼りとした男性労働者からの支援と組織化の主な対象であった移民系女性労働者から組合運動に対する理解が得られずに組織化の運動が遅々として進まない状況に直面したとき、もっとも組織化の活動に熱心であったニューヨーク支部が「リーグの力は、組織化を推進するためにどれだけ女性労働者を啓発できるかにかかっている」⁽³²⁾と認識するに至ったように、リーグは社会改革を念頭に入れた広報・教育活動に重点を置くようになった。こうした方針の転換は、同支部にだけみられたものではなく、リーグ全体の潮流となった。これは、リーグが労働運動よりはフェミニズム運動により深く関わるようになったこと、すなわちリーグ内における賛同者の相対的影響力が大きくなったことを如実に物語っていたし、ひいてはリーグの2つの目的に対する賛同者と労働者階級の女性の微妙な相違が表面化することでもあった。手段の目的化に伴う方針の転換は、シスターフッドの思想に暗い影を落とすことになった。

リーグの活動が女性労働者の関心をフェミニズム運動に統合するという賛同者の理想とした方向に進むことを決定づけたのは、労働者の保護と女性参政権の立法化への方針転換であったが、その前段階として広報・教育活動への方針転換があったことに注意を払わなければならない。勿論、女性労働者の組織化が予期した成果をあげられずに立法化の活動に移行していく背景には、AFLの女性労働者に対する敵対的な姿勢、そして被組織者である移民系女性労働者の民族的な文化規範に根ざす消極性などの外的な要因を十分に考慮しなければならない⁽³³⁾。しかし、異なる階級に属し、目的に関しても微妙な相違をもつ女性をリーグに結集させたのはシスターフッドの思想であった。ただ、この思想には性が同じであることを除けば確固とした共通の認識があるわけではなく、すべての女性が強い絆で結ばれ同じ考えを共有できるとする理想化された女性像は曖昧な性格をもっていた。例えば、女性は抑圧された集団であるという点ではメンバー間に共通の認識があったが、労働者としての経済的抑圧と女性としての社会・政治的抑圧のどちらにより強い不満を感じていたかという抑圧の解釈は一樣であったわけではない。また、仕事に対する意識、結婚観や人生観が多様であるのは当然である。ただ逆説的ではあるが、シスターフッドの思想は不明瞭であるが故に異なる階級に属す女性を一つの組織に結集させる力となりえたのである。その意味で、リーグはシスターフッドの思想という脆弱な連帯意識によって結ばれたゆるやかな連合体であったといえよう。しかし、広報・教育活動に重点をおくようになっていくことは、シスターフッドの思想にあって重視した平等な立場に綻びをもたらす前兆となり、やがてリーグが立法化の活動に専念するようになると、このゆるやかな連合体は設立当初より組織に内在する修復可能な綻びを繕えなくなったのである。

〔注〕

- (1) リーグはイギリスの女性労働組合連盟をモデルとして設立されたが、より正確にはパターソン (Emma Paterson) が1873年にニューヨークにある2つの女性労働組合の影響を受け、イギリスへ帰国した翌年に同連盟を設立したという経緯がある。Allen F. Davis, "The Women's Trade Union League: Origins and Organization," *Labor History*, 5 (1964), p. 10. リーグの設立経緯及び組織化の活動については拙稿「女性労働運動にみる階級と性」『アメリカ研究』(アメリカ学会) 第23号 (1989年), 82-85ページを参照。
- (2) 同論文、95ページ。
- (3) Agnes Nestor, "A Call for Service," *Life and Labor*, II (March, 1912), p. 67. また本稿の注(12)を参照。
- (4) U. S. Department of Commerce, *Historical Statistics of the United States, 1789-1945* (Washington, G. P. O., 1949),
- (5) Jacob Riis, *How the Other Half Lives; Studies among the Tenements of New York* (Hill and Wang, 1957), p. 124. ニューヨーク市のユダヤ系労働者については野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』(山川出版社、1995年)が詳しい。
- (6) 女性労働者の組織化などの日常的活動は実質的には各支部単位で行われた。リーグの支部は当初ニューヨークの他にボストンとシカゴの3都市に、そして後にクリーヴランド、ボルティモア、カンザス・シティ、デンヴァーに設立された。Davis, *op. cit.*, p. 12; "Third Biennial Convention," *Life and Labor*, I (August, 1911), p. 228.
- (7) "The Girl's Own Stories," *ibid.*, I (February, 1911), p. 51.
- (8) Nancy S. Dye, "The Women's Trade Union League of New York, 1903-1920," (Doctoral dissertation, University of Wisconsin, 1974), pp. 10-15.
- (9) *New York Times* (March 26, 1911); "The Triangle Fire," *Life and Labor*, I (May, 1911), p. 137-140.
- (10) Davis, *op. cit.*, p. 11; Dye, *op. cit.*, p. 59.
- (11) Mary E. Dreier, "Expansion Through Agitation and Education," *Life and Labor*, I (June, 1921), p. 163.
- (12) Davis, *op. cit.*, p. 11; Robin M. Jacoby, *The British and American Women's Trade Union League, 1890-1925* (Carlson Publishing Inc., 1994), p. 15.
- (13) Dye, *op. cit.*, pp. 39-43; William L. O'Neill, *Everyone Was Brave: The Rise and Fall of Feminism in America* (Quadrangle Books, 1969), pp. 77-106. また、労働組合の女性が中心になって設立され、富裕階級の女性と協力することを目指したものにイリノイ女性連合 (Illinois Women's Alliance) があったが、同組織の活動は工場の調査や規制、義務教育と新しい学校の設立、未成年者の労働禁止に向けられた。サラ・エヴァンズ (小桧山ルイ他訳)『自由のために生まれて — アメリカの女性の歴史』(明石書店、1997年)、257ページ。
- (14) 羽鳥、前掲論文、83-85ページ。またセツルメントについては拙稿「セツルメント・ワーカーによる社会再建の活動 (上) — 世紀転換期から1912年まで」『静岡英和女学院短期大学紀要』第24号 (1992年2月) 197-206ページ、「セツルメント・ワーカーによる社会再建の活動 (下) — 1912年から1920年代」『静岡英和女学院短期大学紀要』第25号 (1993年2月)、273-281ページを参照。
- (15) Dye, *op. cit.*, pp. 308-310.
- (16) Frances S. Potter, "The Educational Value of the Women's Trade Union," *Life and Labor*, I (February, 1911), p. 36.

- (17) Violet Pike, *New World Lessons for Old World Peoples* (Women's Trade Union League of New York, 1912) quoted in Dye, *op. cit.*, p. 266.
- (18) Dreier, *op. cit.*, p. 163.
- (19) *Ibid.*, pp. 163-164.
- (20) William H. Chafe, *The Paradox of Change; American Women in the 20th century* (Oxford University Press, 1991), pp. 83-84.
- (21) *Ibid.*, pp. 270-271.
- (22) "Vocational Training: Symposium by Frances S. Potter, Mary Anderson and Alice Henry," *Life and Labor*, III (February, 1913), pp. 41-44; "The Women's Trade Union League Answers Questions of the Commission on Vocational Education," *ibid.*, IV (June, 1914), pp. 203-204.
- (23) Agnes Aitken, "Teaching English to Our Foreign Friends: Part II. Among the Italians," *ibid.*, I (October, 1911), p. 309.
- (24) Ruth I. Austin, "Teaching English to Our Foreign Friends," *ibid.*, I (September, 1911), pp. 260-62.
- (25) その際にしばしば使用されたがパイクのテキスト（注17を参照）である。Jacoby, *op. cit.*, p. 51; Dye, *op. cit.* p. 265.
- (26) "The Fourth Biennial Convention, Tenth Anniversary, National Trade Union League," *Life and Labor*, III (July, 1913), pp. 209-210.
- (27) *Ibid.*; Jacoby, *op. cit.*, pp. 55-67. 女性労働者のなかから労働運動でリーダーシップを発揮できる優れた人材を発掘して専門のオルグを育てるという試みは、すでにニューヨーク支部で行われていた。ポーランド系ユダヤ人で、ニューヨーク支部の有力なメンバーとなるのシュナイダーマン (Rose Schneiderman) が、1905年に同支部参加後まもなく富裕な賛同者からの資金援助を得て私立大学のブレップ・スクールに通ったという例がある。Dye, *op. cit.*, p. 313. この前例をリーグの教育活動の一環として組み込むというのがロビnzの提案であったと思われる。また、1921年から1930年代半ばまでプリンモア大学で「女性労働者のための夏期学校」が行われ、後に労働運動で指導的役割を果たす女性を輩出したという。エヴァンズ、前掲書、306-307ページ。エヴァンズはこのプログラムが斬新な試みであったと指摘しているが、その内容はリーグのによるオルグ育成プログラムとほぼ同じである。
- (28) 例えば、セントルイス大会の会長講演では最低賃金とともに産業教育の必要が取り上げられている。
 "The Fourth Biennial Convention," *op. cit.*, p. 209. その内容は、非常に多くの少女が初等教育課程を修了しないまま社会に出て働き始めている現状を考慮して、性による差別のない平等なカリキュラム——例として、科学の授業では男子生徒が基礎の物理学を学ぶのに対して、女生徒は染みや汚れの取り除き方が教えられていることが指摘されている——とともに、産業界で働き始める準備として、若年労働者を保護するために制定されてきた法律などの知識を身につけさせる特別な教育を公立学校で早い時期から平易に工夫をして実施すべきであるとする提案である。Margaret Dreier Robins, "Industrial Education," *Life and Labor*, IV (August, 1913), pp. 228-232.
- (29) "Editorial," *Life and Labor*, I (January, 1911), p. 1; Jacoby, *op. cit.*, pp. 42-43.
- (30) *Ibid.*, p. 50.
- (31) Margaret Dreier Robins, "Self-Government in the Workshop," *Life and Labor*, II (April, 1912), p. 109.
- (32) *Ibid.*, p. 50.
- (33) 羽鳥「女性労働運動にみる階級と性」、86、96-97ページ。